

“届けよう、服のチカラ” アワード 2019 年度受賞校

【最優秀賞】

学校名	中京学院大学附属中京高等学校（岐阜県）
学年	高校1・3年生
人数	37名
活動の枠組	普通科 国際コース
活動テーマ	プロジェクトの認知が広がり、より多くの難民を助けるために 回収枚数ではなく、回収の協力を依頼する施設数にこだわって活動
活動内容や 成果	最終目標は「一人でも多くの難民を助けること」と全員で確認して回収活動をスタート。地域の方々を中心に協力依頼の範囲を広げ、43施設に協力いただき、26,521枚の服を回収した。実際に自分たちの力で難民の助けをすることで、世界を近くに感じた国際理解活動になった。さらに大学で学びたいことが明確になったり、将来の方向性が見えてきたりする生徒が増えた。「知る」から「動く」までの実践的な活動となった。



活動の趣旨を“自分たちだけで本気で集めても限界がある。全国のより多くの人に難民の現状とこのプロジェクトのことを知ってもらい、全国各地で行われているこの活動にたくさんの人に協力してもらおう。そうすればプロジェクト全体として、より多くの子も服を難民に届けられるのではないかと。回収枚数ではなく、回収協力してもらえる施設数にこだわろう”と定めた。



高校生にも伝わりやすいよう、SNSなどを活用した発信活動を行った。その結果、他校の生徒が臨時ボランティア団体を立ち上げ、独自で呼びかけと服の回収を行ってくれた。他にも、本校の活動を知り、わざわざ学校まで服を届けてくれたり、発送してくれた人もいた。

【優秀賞】

学校名	北見市立上仁頃小学校（北海道）
学年	小学校 1～6 年生
人数	19 名（全校生徒）
活動の枠組	総合的な学習の時間
活動テーマ	世界・地域とつながろう!! 『服のチカラプロジェクト』
活動内容や成果	企画や計画は、主に 5・6 年生 8 人で行い、ポスターや回収 BOX 作成、服の梱包作業は全校児童全員で行った。告知活動では、見ず知らずの人に声をかけたり、大声で伝えたりと、これまで経験のないことだったが、一人一人に声をかけ、多くの方に知ってもらえた。振り返りの時間では、世界のどこかで困っている自分と同じ年齢の子ども達に笑顔が届けられることの”喜び”、自分たちにもこんな大きな活動ができたという”自信”、自分たちだけではここまで集めることができなかつたため保護者や地域の方々、北見市のみなさんの”優しさ”など、この学習で感じられた思いがたくさん出され、唯一無二の活動となった。



北見市最大の祭りでの告知活動。上級生と下級生の子がペアになり呼びかけた。6年生がパソコンで作ったポスターやフライヤーを手に、一人一人に声をかけ、目を見てこの活動の思いを伝えた。多くの方が足を止め、真剣に子ども達の話に耳を傾けてくれた。



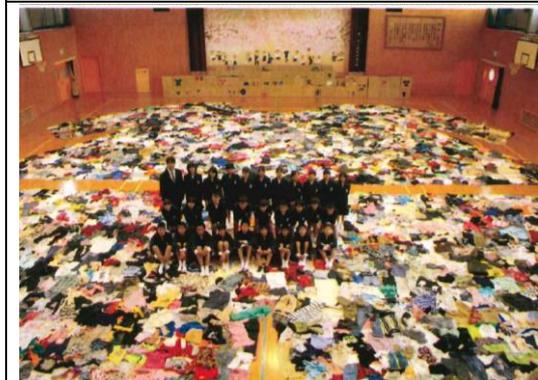
8133 着回収した。回収 BOX を置いていただいた場所に、感謝の気持ちを込めたポスターを持参しお礼に伺った。

【優秀賞】

学校名	備前市立片上小学校（岡山県）
学年	小学6年生
人数	28名
活動の枠組	総合的な学習の時間、特別の教科道徳
活動テーマ	難民問題を「他人事」ではなく「自分事」として受け止めよう ～特別の教科道徳と関連を図り、国際理解・国際親善について考える～
活動内容や成果	プロジェクトの活動を単元構想(全75時間)に組み入れ、1年間を通して学習した。じっくり難民と向き合い、難民について理解してからスタートし、特別の教科道徳と関連を図りながら、国際理解・国際親善についての学習を繰り返し行い、児童の内発性を育てることによって、児童は主体的に活動に取り組むことができた。JICAとの連携では、JICAの国際協力を知ったり、専門家のお話を聞いたりすることによって、今まで自分たちが調べてきた課題を解決したり、新たな疑問や課題を見つけて、次の活動への動機づけとなった一見何の関係もないように思える難民問題を「他人事」ではなく「自分事」として受け止め、身近にできる社会貢献活動を行い、深い学びを行うことができた。



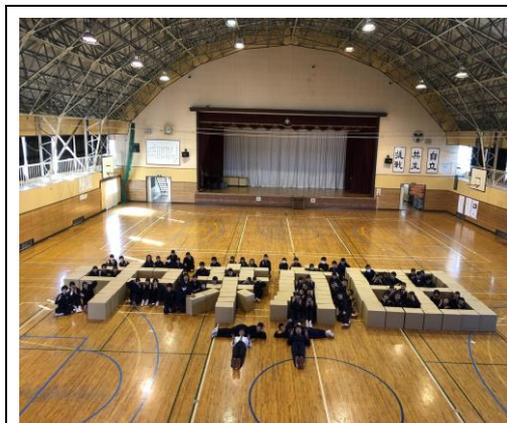
協力依頼先を増やし、子ども園、市内の小中学校、高等学校、大学と協力して回収活動を行った。備前市内の様々な世代の方々が繋がりみんなが一丸となって回収することができた。児童の真剣な眼差し、難民を笑顔にしたいという優しい気持ちに共感してくださり、多くの方々が協力してくださった。



昨年度回収した服は4,739枚（段ボール48箱）で、今年度は7,362枚（段ボール74箱）と約1.5倍の服を回収することができた。回収した服は、体育館のフロアにシャツとズボンの形に並べて撮影した。この活動を通して、自分たちが集めた子ども服の数を実感し、達成感や満足感を味わうことができた。

【優秀賞】

学校名	加美町立中新田中学校（宮城県）
学年	中学2年生
人数	89名
活動の枠組	総合的な学習の時間
活動テーマ	加美町を動かし、「服のチカラ」を世界に届けよう！ ～中学生のいま、世界のためにできることを考え、実行する～
活動内容や成果	<p>国際理解教育の導入という位置付けで本プロジェクトに参加。学年のリーダーによるテーマ設定（上記）と回収先の業種で分けたプロジェクトチームを編成した。計画段階では、チームごとに回収場所のリストアップやPRと回収方法を検討し、さらに小グループに分け、「5W1H」に着目し、企画書を作成した。「活動を多くの人に知ってもらい、協力してもらおう」という視点で企画書づくりを行う中で計画力や問題解決能力などの課題対応能力が高められた。回収先には直接出向き、大人を相手に説明や打合せを通して、コミュニケーション能力が高まった。</p> <p>ポスターやチラシ、回収箱の作成時には、回収対象の年齢層に目を向け、言葉の使い方やPRの方法を工夫した。また、生徒たちは回収状況に気を配り、夏休みや放課後の時間を使って回収作業を行った。</p> <p>自発的に活動させることで、いろいろな生徒がリーダーシップを発揮した。また、協働的に活動する雰囲気醸成された。テーマの達成に向けて活動する姿には、社会参画意識や責任感の高まりが見られた。</p> <p>さらに、本校の取組を新聞で知った町外の中学校の生徒会が、自発的に服を集め、届けてくれた。「自分たちにできる社会貢献」を考える活動が他校にも波及することとなった。</p>



東日本大震災に伴う二次避難で加美町に身を寄せた経験がある南三陸町の方からは、「8年前の恩返しになれば」という思いから、大量の服を回収し届けていただいた。その様子が地元紙で紹介された。最終的には190箱分の服が集まった。PR・回収の過程で、生徒たちは多くの方の善意に触れ、社会の一員としての生き方について、学ぶこととなった。

【審査員特別賞】

学校名	大和郡山市立矢田小学校（奈良県）
学年	小学5年生
人数	39名
活動の枠組	総合的な学習の時間
活動テーマ	We are the world ～出会いは成長の種～ これまで自分の住む周囲の人としか出会ってこなかった子どもたちが、世界の現状を知ること で「私たちと共に生きる人のために」を合言葉に、自分たちができることを全力で取り組む
活動内容や 成果	出会いこそが人間性を高め、心を豊かにする。山の麓に学校があるということもあり、人と出会う機会が極めて少ない児童に出会いの場を求めて活動に参加した。活動は、教師が考えた計画通りに動くのではなく、自分たちで真剣に考えて、39名全員で話し合った内容を実行していくことを大切にされた。依頼の手紙やポスターを作成する際には、内容や思いが伝わるよう工夫を重ね、心をこめて作成した。世界の現状を分かりやすく、そして5年生の思いが伝わるような9分間の映像も作成した。活動を通して、児童たちは地球という一つの大きな集団の中で生きているという感覚を養うことができた。

	<p>回収BOXは、世界に笑顔の花を咲かせるという思いをこめて、「笑顔の種BOX」と題し、みんなが興味をもてるようなイラストを考えた。</p>
	<p>2週間の回収期間後、集めた服を子どもたちで数えた。1162着もの服が集まり、子どもたちは「これで難民の子どもたちに届けられるね。」と嬉しそうな表情をしていたのが印象的であった。きれいにたたまれた服を届けたいという子どもたちの思いもあり、その後全員で1着1着ていねいに服をたたんだ。</p>

【審査員特別賞】

学校名	松原市立松原中学校（大阪府）
学年	中学2年生
人数	158名
活動の枠組	総合的な学習の時間
活動テーマ	届けよう服のチカラ！人のチカラ！～みんな笑顔になあれ～
活動内容や成果	ねらいは①国際問題・環境問題（リサイクル）に目をむける。②1年時に学んだ「正しく知る」⇒「考える」⇒「自分の行動（生き方）につなげていく」というステップで、さらに広い視野を持つ。③自分にできることは？という自分の中にあるボランティアスピリットを引き出し、行動し、人の役に立つやりがいを感じる。④プロジェクトチームで主体的に取り組み、伝える手法や回収に効果的な行動を模索する中で、発想力、プレゼン力・チームワーク力などを身につける。⑤地域連携により、できることが増えることを体感し、感謝の念を育む。以上をねらいとし、活動を開始した。出張授業後にボランティアを募集すると、約100名集まった。ボランティアメンバー全員にやりがいを持たせるため、広報・呼びかけ・回収の3つの班に分け、さらにその中で仕事を細分化してすすめていった。夏休みの間に行った協力依頼先でのプレゼンでは、校区の各学校・園の先生、保護者、児童、園児たちにプロジェクトの趣旨を分かってもらい、心を動かして行動に移してもらうには、とにかく丁寧に伝えていくことが大切であろうと、こまめに訪問を続けた。プレゼンに行くにしても、朝会に行くにしても、同じような内容であってもメンバーは変える。固定した少人数で活動するよりも練習は大変になるが、多くの生徒が主体的に取り組むことは大きな成果であった。「自分たちで会社が作れそう」という発想が生まれるほどであった。



集めた服は最終 5054 着（43 箱）。
 体育館にハートと手のひらの形に並べる様子をコマ送りにしたもの、ドローンで撮影したもの、そして最後に、学年全員で「ありがとうございます」とお礼を言うシーンを編集した動画を作成した。

【審査員特別賞】

学校名	山口県立徳山商工高等学校（山口県）
学年	高校3年生
人数	28名
活動の枠組	商業・選択科目「商品開発」
活動テーマ	<p>サステナビリティの視点、グローバルな視点を持つよう！</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校商業の専門科目を学ぶ生徒として、サステナビリティの視点を持った活動を行う ・難民の子どもたちに思いを馳せながら、自分たちにできることは何かを考え、地域活動を行う
活動内容や成果	<p>6月の出張授業に感動を受けた生徒たちは、プロジェクトの取組に強い意欲を示し、子ども服回収目標を500着に設定した。その設定目標を達成するためには、校内への呼びかけや各自の知り合いのつてを辿るだけでは子ども服は集まらないだろうと考え、班別に分かれて、夏休み中に地域の幼稚園・保育園・小学校・中学校へ本活動の趣旨説明を行い、協力依頼を行った。各班がアポイントメントを入れようと考えている所をピックアップし、協力依頼先がかぶらないように全体で調整したうえで、協力依頼の活動に入った。依頼先の方が、また別の施設に依頼をしてくださり協力の輪が広がっていった結果、目標の500着を大きく超え、最終的には10278着・段ボール箱71箱回収した。</p>

	<p>活動報告会・引き渡し式では、出張授業でお世話になったユニクロ山口本社の方をお迎えした。生徒たちは活動の報告やエピソード、感謝の気持ちを述べた。当日は、テレビ山口・中国新聞・日刊新周南も取材に来られた。</p>
	<p>生徒たちの手で71個の段ボール箱をトラックに運んだ(所要時間約30分)。トラックが学校を出発したとき、トラックを追いかける生徒や、トラックを見送った後「活動が終わって寂しい」とつぶやく生徒もいた。</p>

【UNHCR 特別賞】

学校名	大妻中野中学校・高等学校（東京都）
学年	中学2～3年生
人数	34名
活動の枠組	学年横断型課外授業
活動テーマ	“服のチカラ”から始まった、私たち中高生にできる難民支援
活動内容や成果	学年横断型の課外授業での取組として2018年から服のチカラプロジェクトに参加した。前年回収した服は400着。「どうしてもっと集めることができるだろうか？」より多く集めその服を必要とする人たちに届けるためには、まず自分たちが難民のおかれている状況を理解し、多くの人たちに伝える必要があると考えた。出張授業の前に東京大学総合文化研究科のゼミで日本在住のロヒンギャ男性からミャンマーにおけるロヒンギャ迫害の歴史や現状、難民として日本で暮らす困難さを学んだ。授業後には、大妻中野×UNHCRで難民映画祭を開催したりと、難民が生まれる社会的背景、難民として難民キャンプや他国で暮らす現状、難民の方々の思いなど、深く学び、より多くの人たちに伝える活動に力を入れた。

	<p>「アイアムロヒンギャ」を上映後に、ロヒンギャ女性でユニクロ社員の方による講演、ワークショップを行った。約100名の参加者ととも難民の現状理解と、支援の在り方を議論した。難民問題は遠い外国の話だけでなく、日本に住む私たちの身近にもある問題であることを学ぶことができた。</p>
	<p>近隣の保育園を訪問し、「なぜ私たちが子ども服を集めているのか」人形劇を使って園児たちに説明した。回収箱や保護者向けチラシは、園児たちが親しみやすいデザインにするなど工夫した。</p>